

## 詩人の嗅覺

——黃庭堅作品における「香」の表現——

早川 太基

京都大學

### 一 キーワードとしての嗅覺

黃庭堅（一〇四五—一一〇五）による文學作品の特性を探るひとつの手がかりとして「香」への嗅覺という角度からのアプローチを試みよう。前世は畫家であったであろうと語る王維は視覺を言葉にあらわした色彩感覺の豊かな作品を作り、音樂を好んだ白樂天は「琵琶行」において聽覺をあざやかに表現してみせたように、生まれつきの鋭敏なる五感の感度は、時として個人の創作の方向性を決定する。黃庭堅の作品における「香」にたいする視點と表現方法は、以下に検討してゆくように非常に獨特であり、あるいは嗅

覺にすぐれた詩人という見方も可能かもしれない。

勿論「香」に着目した文學作品自體は古代から多く存在し、詠まれる内容としては、草花の香および香料による香の二種類に大別される。「楚辭」にくりかえし登場する香草はその先驅けであり、南方や西域からさまざまな香料がもたらされた漢代以降には「反魂香」や荀令留香・魏武分香・韓壽偷香・謝玄佩香などの故事が生まれ、同時に劉向「博山爐銘」・昭明太子「銅博山爐賦」・梁元帝「香爐銘」など香爐にちなむ作品も作られ、また香料を題材とする左芬「鬱金香頌」・江淹「瑞沉寶峰頌」なども生まれた。魏文帝「迷迭香賦」・傅玄「鬱金香賦」・傅咸「藝香賦」・江淹「藿香頌」・楊炯「幽蘭賦」などには、草花の芳香を巧みに描寫する部分がある。なかでも『玉臺新詠』に収録される無名氏の「博山爐」・劉繪「博山香爐」・沈約「博山香爐」などの六朝の作品は、香爐や煙の様子を多くの比喩を用いながら華麗に詠いあげてゆき、描寫も非常に細かい。唐詩においては點景として香を焚くシーンが大量に出現し、ことに古代の香關係の書物によく引用される李商隱「燒香

曲」は女道士を描いたものであるが、焚香が效果的に用いられている。また宋代における丁謂「天香傳」は香料とその産出背景が細かに記される異色作といえる。しかし如上の作品に共通して見られるのは、香を外側から客観視し、香爐や煙などの外観を多様に表現し、あるいは香の珍しさを特筆するという基本姿勢であり、あくまでも香をテーマとした一種の詠物の領域に留まる。

黄庭堅の詩における「香」は、そのような詠物詩とは明らかに相異なる内容をあわせ持つ。以下、まずは最も身近に存在する自然界の草花の香をどのように捉えているかを見てゆこう。

## 二 黄庭堅の詩における花の香り

臺灣故宮博物院所藏の黄庭堅「花氣熏人帖」<sup>①</sup>七絶の起句は印象的な佳句であり、作者の藝術的感性の、ある一面を象徴する。

花氣熏人欲破禪 花氣 人に薰じて禪を破らんと欲す。

す。

「禪」の寂靜を求めつつも「花氣」に破られるという設定は、心頭を滅却すれば火も自ずから涼しという句の翻案にも似た詠み方であり、それは詩人の心には薫りたつ「花氣」に目覚めずにはいられない天賦の感性——あるいは執着ともいふべき心が存在するゆえの必然的結果であろうか。迫り来る「花氣」の美に酔いしれるという意味において「破禪」とは一種の快感かもしれず、「禪」の静と「花氣」の動との不思議な葛藤のはざまにある自身の姿を描きだし、そこに獨特の肉聲を感じさせ、緊張感を生み出す。香は詩人の内面にまで深く沁みとおおり、同時に破壊が始まる。

黄庭堅の作品ではこのように、詩人の花の香りへの鋭敏なる感覚が、獨自の世界を織り成している。宋代においては詠花詩も新たに發展をとげ、たとえば「蠟梅」「水仙」「酴醾」「山礬」など前代には詠まれることの少なく、もしくは皆無であった花が注目を浴びるようになり、黄庭堅はいずれの花においても名作を残している。ここで注意すべきは、「蠟梅」「水仙」「酴醾」「山礬」は皆いずれも特色

ある芳香をはなつ花という共通項であり、黃庭堅の個人的關心もまた主としてそこに在ったとも推測できる。

次に擧げる元祐元年（一〇八六）に詠まれた五絶「戲詠蠟梅二首」（丙集卷五）は、詩自體の完成度および他者への影響力の二點において、黃庭堅作品における香りの世界のひとつの到達点といえる。蠟梅は黃庭堅が初めて價值を見出して二首の絶句を作り、これにより都において流行し、花としての文化的地位が確立した。その火つけ役となった當作品において詠まれた蠟梅特有の魅力とは、香りにほかならない。

金蓓鎖春寒 金蓓ばい 春寒に鎖され、

惱人香未展 人を惱ますの香ははまだ展びず。

雖無桃李顔 桃李の顔は無しといへども、

風味極不淺 風味、極めて淺からず。

ここでもやはり「花氣薰人帖」と同じく、惱ましいいばかりに人に迫りくる芳香が表現される。「蓓」とは『集韻』卷五に「蓓蕾、始華也——蓓蕾、始めて華ひらくなり」とあるように蕾のこと。金色の蕾のなかに「惱人香」を秘め

た花はなおも寒氣に閉ざされる。「桃李顔」は夙に六朝詩にも見える語であるが、任淵注も引用するごとく李白「古風五十九首」其十二「松柏本孤直、難爲桃李顔——松柏もと孤直に、桃李の顔を爲し難し」において對比として用いられるものが最も本詩の用法に近い。この詩全體の構造は、香る花を直接に描くのではなく「香未展」と述べるように一種の想像あるいは記憶のなかの香氣を詠うわけであり、そこに強い陶醉・待望を感じさせる。「風味極不淺」という飾らずにしかも斷定的な口吻で終わることもまた、具體的にはいかなる花であろうかと、讀者の興味を掻き立てるであらう。

二首目は以下の通りである。

體薰山麝臍 體は薰ず 山麝の臍、

色染薔薇露 色は染む 薔薇の露。

披拂不滿襟 披拂、襟に満たざるも、

時暗香度 時に暗香の度わたるあり。

二首目の起承句は對句であり、麝香と薔薇という二種類の香物をもって比況となし、措辭としても華麗である。轉

句の「披拂」は『莊子』「天運」に見られる雙聲の語、『經  
典釋文』には「風の貌」とある。つまり風に吹き揺らされ  
ても、胸にあふれるほどには香らないが、時には忍びやか  
に、ふと鼻をかすめる。この二句は林和靖「山園小梅」其  
一の「暗香浮動月黃昏」の名句を連想させ、花の香りの微  
妙なる浮動性を細かにとらえる。

次に香りをテーマとし、いささか趣向を凝らした詩を見  
てみよう。建中靖國元年（一一〇二）春の荊州滞在時には  
「王充道送水仙花五十枝欣然會心爲之作詠」（丙集卷十五）  
「劉邦直送早梅水仙花四首」（同上）など、梅や水仙を詠  
んだ名作を多く残している。以下では先行研究において取  
り上げられることの少ない、荊州長官の馬城に次韻した  
「次韻中玉早梅二首」其二（同上）を分析する。

折得寒香不露機 寒香を折り得て機を露はさず、  
小窓斜日兩三枝 小窓の斜日、兩三枝。  
羅帷翠幕深調護 羅帷、翠幕、深く調護するも、  
已被遊蜂聖得知 已に遊蜂に聖くも知らるるを得た  
り。

詩人の嗅覺（早川）

任淵注では、一首目に「知公家有似梅人——知る公の家  
に梅に似たるの人あるを」とあるためか、この詩もまた馬  
城の家の妓女のすがたを重ね合わせた戯れの作である可能  
性を指摘するが、如何であろうか。

詩は謎めいた起句から始まり、凜として香る梅の枝を手  
折るといふ行爲は、あたかも祕すれば花といふが如く、す  
べて「不露機」の隱密裏に行われたという。「露機」は、  
たとえば黃庭堅と親交のあつた晦堂祖心の偈頌「日暮郊  
行」にも「不露機關人不識——機關を露はさざれば人識ら  
ず」<sup>③</sup>とあるごとく禪語であり、詩にさらに意味深な印象を  
あたえる。雨降る窓邊に二三本の梅を活けたところ、幾重  
ものカーテンに隔たれた室内であるのに「聖得知」の蜂は  
香りを求めてやってきた。「聖得知」という語法は韓愈  
「盆池五首」其四を初用例として宋代以降に盛んに用いら  
れるが、聰明にも察知し得たという意味である。ここにお  
いて謂わば「不露機」と「聖得知」とが呼應し、梅の香り  
という特性はたとえ隠しても隠しきれぬものでなく、また  
蜂は香りを敏感に察知するのが本性ゆえに、自然と「折得

「寒香」にまつわる一切の「機」が露わになった。香りを媒介とし、短い一首のなかに梅花と蜂とのあいだの一種の必然的邂逅が詠われ、あるいは情味豊かな哲理詩としても讀み解ける。

黃庭堅は最晩年の政變により流罪に遭い、崇寧三年（一一〇四）には宜州に赴くことになったが、その途次において「戲詠高節亭邊山礬花二首」其一（丙集卷十九）を残している。

北嶺山礬取意開 北嶺の山礬、意を取りて開き、  
輕風正用此時來 輕風、正に此時をもつて來たる。

平生習氣難料理 平生の習氣、料理し難く、  
愛着幽香未擬回 幽香に愛着して未だ<sup>か</sup>回るを擬せず。

山礬とはハイノキ科ハイノキ屬の樹木であり、同詩の序に記すところでは原名を「鄭花」と稱したが、王安石が俗であるとし、結局はその葉が黄色の染料として用いられることから黃庭堅自身が新たに「山礬」と名づけたとある。開花時期にふさわしく吹きわたる「輕風」は後半の「幽香」を導きだすための伏線となっている。後半において詩

人みずから抑えられない「平生習氣」ゆえに「幽香」に魅了せられて立ち去りえないと説くのは、あっさりとした節らぬ口調のなかに、作者平素の花香を愛する肉聲を聞くかのようなのである。

最後に、流刑地において書かれたと思われる書簡「與李端叔三」其三を見てみよう。

數日來驟暖、瑞香・水仙・紅梅盛開、明窓淨室、花氣撩人、似少年時都下夢也。但多病之餘、嬾作詩耳。<sup>⑤</sup>

數日來、驟かに暖く、瑞香・水仙・紅梅盛んに開き、明窓淨室、花氣 人を撩し、少年時の都下の夢に似たるなり。ただ多病の餘、詩を作るに嬾きのみ。

瑞香とは沈丁花のことである。沈丁花・水仙・紅梅はともに清冽な芳香をもつ花であり、その香氣により、あたかも若いころの汴京の夢のような日々を思い出すという。流罪および多病という苦境に立ち、詩を作るのは物憂いようであるが、花の香りという美にたいする鋭敏な感覺はいささかも衰えず、心が亂され搖さぶられるという。黃庭堅における藝術の天分とはこのような言葉からも讀み取れるの

かもしれない。香りに酔い癡れ、そして詩は作れないと言いつつも、ついには詩のように美しい情感にあふれた書簡が生み出される。

### 三 黃庭堅と聞香

自然界の花香を愛する詩人は同時に、みずからの手により香材を組み合わせ、好みの芳香を作り出すことにも熱心であった。黃庭堅と香文化との関わりについてはすでに何篇かの論文が發表されている。また薬學に精通していたことは吉川幸次郎「詩人と藥屋——黃庭堅について」にも詳細に述べられ、黃庭堅の尺牘にも藥の調合についての記事が散見される。ゆえに以下においては(一)では黃庭堅の香にかかわる背景について補足を加えながら説明し、(二)以降にて香が言葉としてどのように表現されるかという、いわば文學的特質を中心に分析してゆく。

#### (一) 黃庭堅と香

黃庭堅の文集には、香への情熱を證明するがごとく「漢

詩人の嗅覺(早川)

宮香訣」「嬰香」「意和香」「意可香」「深靜香」「荀令十里香」「小宗香」「百里香」「篆香」などの調合法を記した文章が収録される。臺灣故宮には「嬰香」の調合を記した、文集所載のものとは字句のやや異なる「藥方帖」と稱される眞蹟が残されている。

また宋代香文化の集大成といえる陳敬『陳氏香譜』の卷二には「黃太史清眞香」があり、卷三には「黃太史四香」として「意和香」「意可香」「深靜香」「小宗香」の四種類の調合法が挙げられる。「黃太史」とは哲宗朝において『神宗實錄』編纂の史官に任ぜられたゆえの呼稱。「四香」は、とくに黃庭堅の思い入れの深い香であったとみなされ、すべて自分の手により調合法を書き残している。なかでも「意可香」と「深靜香」とには跋文が附され、前者は自身による命名であり「不凡」な香氣を放ち、後者は友人の歐陽獻が黃庭堅のために調合して贈與したという背景が記され、「此香恬淡寂寞、非世所尙。時時下帷一炷、如見其人——此の香、恬淡寂寞にして、世の尙ぶところにあらず。時時、帷を下して一炷すれば、その人に見ゆるがこ

とし」とその幽香について描寫する。「四香」の調合については、黃庭堅はことに注意を配っており、「與徐彥和三首」其三のような書簡もある。

前所寄香、似與小宗不類、亦恐是香材不妙、使香材盡如所惠蘇合之精、自可冠諸香矣。意可尤須沈材強妙。前錄意可方去、似遺兩種物。蓋當於諸香後云「龍腦、麝香各三錢、別研」。若果遺、幸増入。<sup>⑩</sup>

前に寄するところの香、「小宗」と類せざるに似たるも、また恐らくは是れ香材 妙ならず、香材をして盡く恵むところの蘇合の精のごとからしむれば、自づから諸香に冠たるべきかな。「意可」、尤も須く沈材強妙なるべし。前に「意可」の方を録し去るに、兩種の物を遺るるに似たり、けだし諸香の後に當たりて云く、「龍腦、麝香、各の三錢、別に研す」と。もし果たして遺れしかば、幸くは増し入れよ。

内容は「小宗香」と「意可香」について述べており、原料の質や、前回書き記したメモには遺漏がある可能性などについて細かな配慮がなされ、マニアぶりを裏打ちする。

次に黃庭堅の周囲の人物を見てみよう。早世した妹の子であり、同時に母李氏の妹の孫である洪芻、字は駒父は、じかに黃庭堅から詩法を學び、のちに江西詩派として數えられる人物であるが、また「香譜」という著作がある。香の調合法や故事について詳しい記述があり、北宋期の香文化を知るうえでの重要な資料である。<sup>⑪</sup>『陳氏香譜』卷三には、洪芻にちなむ「洪駒父百步香（別名は萬斛香）」「洪芻父荔枝香」が收載され、また「韓魏公濃梅香」には、洪芻による「返魂梅」という別名が注され、および黃庭堅の跋文が附されている。

卷三には他にも「黃亞夫野梅香」という名の調合法が記載される。「亞夫」とはすなわち黃庭堅の父である黃庶の字であり、北宋の歴史資料には姓字の一致する人物は他に存在せず、この「野梅香」はまさに黃庶に所縁のある香である可能性が高い。黃庶が嘉祐三年（一〇五八）に卒したときには黃庭堅はまだ十四歳であったが、その個人的嗜好や習慣はさまざまな面で影響を及ぼしていることは想像に難くない。黃庶の七絶「怪石」はその格律・措辭などの奇

怪なところから後年の山谷體の淵源とも看做されるが、香の世界もまた然りといえようか。

さらに「謝答聞善二兄九絕句」其六には「莘老夜闌傾數斗、焚香默坐日生東——莘老、夜闌たけなほにして數斗を傾け、香を焚き默坐すれば日東に生ず」（内集卷十五）とあるが、この「莘老」とは岳父の孫覺の字である。黃庭堅周圍では黃庶・洪芻と、三世代にわたり調合法に通じ、岳父の孫覺もまた好んで香を焚いており、その香文化へのかかわりの深さは一族ぐるみであった。

(二)「江南帳中香」をめぐる六言絶句

つぎに元祐元年（一〇八六）に作られた「江南帳中香」をめぐる作品を見てゆこう。その調合法については「有惠江南帳中香者戲答六言二首」（内集卷三）の任淵注に「洪駒父『香譜』有江南李主帳中香法、以鶯梨汁蒸沈香用之——洪駒父『香譜』に江南李主帳中香法あり、鶯梨汁をもて沈香を蒸してこれを用ふ」とあり、南唐の宮中由來のものが見なされていた。

詩人の嗅覺（早川）

現存本の洪芻『香譜』にも類似の調合が記載され、『陳氏香譜』卷二にも「江南李主帳中香」として四種類の調合を載せ、前三者はいずれも同様の沈香と梨汁を用いているが、最後のみ配合が「方沉香四兩。檀香一兩。蒼龍腦半兩。麝香一兩。馬牙硝一錢」と大いに異なるのは同名の別法であろう。またそれとは別に同巻には「李主帳中梅花香」があり、その調合は「丁香一兩一分、沉香一兩、紫檀半兩、甘松半兩、龍腦四錢、零陵香半兩、麝香四錢、製甲香三分、杉松麩炭四兩」とある。

黃庭堅の「江南帳中香」に関する詩句のなかでは後に引用するごとく「香螺」「螺甲」「誤以甲爲淺俗、却知麝要防閑」のように明らかに甲香と麝香が用いられており、うち一首の詩題に見られる「有聞帳中香以爲熬蝟者——帳中香を聞きて蝟を熬るとおもふ者あり」という状況も、沈香と梨汁との配合ではいささか考えにくい。よって任淵の説には相反するが、今日傳承される「帳中香」のなかでは「李主帳中梅花香」が最も適合しよう。

以下の「有惠江南帳中香者戲答六言二首」（内集卷三）は、



この「帳中香」を送られた返禮として詠まれている。第一首にはこうある。

百鍊香螺沉水 百鍊の香螺と沉水と

寶薰近出江南 寶薰 近ごろ江南に出づ。

一稔黃雲繞几 一稔の黃雲 几を繞り、

深禪想對同參 深禪、同參に對せんことを想ふ。

「百鍊」は劉琨「重贈盧諶」(『文選』卷二十五)の「百鍊

剛」を借用した表現であり、甲香と沈香とをよく練り合わせた貴重な香を形容する。また「寶薰」は北宋以前には用例は見られず、あるいは黃庭堅の造語とも考えられ、江南の地から伝えられた莊嚴にして絢爛なる香りを想像させる言葉である。轉句の「一稔黃雲」とは、まず「稔」と「穗」とは同字であり、『傳燈錄』卷二「摩拏羅」に記載される摩拏羅尊者が月氏國に來朝する瑞兆として「穗」のごとき香煙が現れたという故事を用いる。この佛典の典故は、次の句において深い禪定の境地をあらわす「深禪」という語が登場する伏線となっている。「同參」はたとえば『傳燈錄』卷六「南嶽懷讓」の項にも「同參九人」とある

ように、ともに參禪する者という意味であり、深い香りのなかで座禪の境地を共有する道友を思いうかべる。短い詩ではあるが、「香螺」「沉水」「寶薰」という華麗なる語をちりばめ、黄色の雲が肘掛をめぐる情景を描き、さらに妙なる香氣は哲理の記憶を呼び起こすと結び、きわめて靜寂なる心境が描き出される。

次に第二首を見てみよう。

螺甲割崑崙耳 螺甲は崑崙の耳を割き、

香材屑鷓鴣斑 香材は鷓鴣の斑なるを屑とす。

欲雨鳴鳩日永 雨ふらんと欲し、鳴鳩、日永く、

下帷睡鴨春閑 帷を下し、睡鴨、春閑なり。

起承句は「崑崙」「鷓鴣」とは語として離合不可であり

しかも偏旁對という巧みな句造りである。後半はのどかな情景であり、しめきった部屋のなかで「睡鴨」のかたちの香爐を用いて香を樂しむ。「日永」と「春閑」とはリラックステした内面の心情をも重ね合わせた表現といえる。

蘇東坡にはこの詩に次韻した「和黃魯直燒香二首」<sup>13)</sup>がある。東坡の香への造詣も深く、『陳氏香譜』卷二「蘇內翰

製銜香」はまさに東坡由來の調合法と考えられ、卷三「韓魏公濃梅香」に附された黃庭堅「跋」には調合法は韓億から東坡に伝えられたと記され、その香文化との密接なかわりがある。詩は左の通りである。

四句燒香偈子 四句の燒香の偈子、

隨香遍滿東南 香に隨ひ、遍なく東南に滿つ。

不是聞思所及 是れ聞思の及ぶところにあらず、

且令鼻觀先參 且く鼻觀をして先づ參ぜしむ。

起句において蘇東坡は、黃庭堅の詩を「金剛經四句偈」や「雪山偈」のごとく佛理を説いた四句の偈頌としてとらえた。舞いあがる香煙に隨い、その偈頌のうちに含まれる思想もまた「帳中香」の發祥地である「東南」——江南の地に行きわたるとするのは壯大なイメージである。

「聞思」は『楞嚴經』卷六に見られる觀音菩薩の修行法を指し、聞くことと思考という行爲とをまとめた言い方である。なお查慎行の注では「聞思」とは「聞思香」という調合法の名である可能性を指摘しており、『陳氏香譜』卷二にも二種類の「聞思香」が載せられる。南宋の『錦繡萬

詩人の嗅覺（早川）

花谷」卷三十三「香」では、香の名の由來を『楞嚴經』に由來するという黃庭堅による解説が引用されているが、明代の『香乘』卷十一「香事別錄」ではあたかも黃庭堅自身の命名のように記され、黃庭堅にちなむ香として理解されていた。

この詩における「聞思」は兩者を掛詞にしている可能性もある。「帳中香」は「聞思」と「聞思香」をも超越した存在であり、ゆえに先ずは「鼻觀」にて香の境界に達してゆこうと詠んだ。「鼻觀」はこの詩の場合は、鼻を通じた香りの觀想——つまりは嗅覺と考えられ、黃庭堅「題海首座壁」（外集卷十三）にも「香寒明鼻觀——香寒くして鼻觀明らかなり」とある。

次に東坡の詩の二首目を見てみよう。

萬卷明窓小字 萬卷 明窓の小字、

眼花只有爛斑 眼花、ただ爛斑らんはんたるあり。

一炷煙消火冷 一炷、煙消えて火冷ややかに、

半生身老心閒 半生、身老いて心閒なり。

「爛斑」は「斑爛」と同じように光彩陸離たる様子をあ

らわすが、ここでは萬卷の書籍のために目のちかちかする様子を形容する。後半の内容は、獨特の視點による觀察であり、香を焚き終えたあとの全てが無に歸した靜寂さを詠み込み、續けて自己の現在をその香煙・香火と重ね合わせるかのように「身老心閒」と説く。

以上のように、この四首の作品の検討を通して、蘇黃の兩者がたがいに次韻を通して詩境を深めあう姿が見てとれる。一首目では黃庭堅が香により觸發され、禪の境地に思いを馳せれば、東坡は香をより禪學的的角度から詠いあげる。二首目では香により成立する靜かな空間を取りあげれば、東坡は「寂滅爲樂」ともいふべき枯れた美學を提示する。

東坡のこの次韻を受け、山谷はさらに「子瞻繼和復答二首」（丙集卷三）を詠む。一首目では前年十二月からの東坡の中央復歸を賀して「迎笑天香滿袖、喜公新赴朝參——迎へて天香の袖に滿つるを笑ひ、喜ぶ公の新たに朝參に赴くを」と宮中の香がその袖に薫じるさまを詠い、昂揚した心情までもが匂いたつたかのである。また聞香の喜びをよ

り深化させた角度から言葉にしたのが第二首である。

迎燕溫風旒旒 燕を迎ふるの溫風は旒旒たり、

潤花小雨斑斑 花を潤すの小雨は斑斑たり。

一炷煙中得意 一炷の煙中、意を得、

九衢塵裏偷閑 九衢の塵裏、閑を偷む。

起承句は春を迎えた都の様子を描寫し、「旒旒」は盧仝「寄贈含曦上人」に「春風醉旒旒——春風 旒旒たるに酔ふ」とあるように、たおやかな春風の形容語である。「溫風」および「潤花小雨斑斑」は濕度の高めなしっとりとした空氣を想わせ、香をこまやかに樂しむに相應しい舞臺裝置はすべて整った。後半では都の雜踏のなかに住むが、一炷の香により、自分一人による自分一人のための祕密の空間が、瞬時に出現することを詠む。「九衢塵裏」という廣い外的世界のなかに身を置くが、意識の焦點があてられるのは「一炷煙中」のみであり、そこにおいては「得意」と「偷閑」とが絶對的價值を持つ。

四句とも對偶を用いた技巧的作品であり、前半の優雅な描寫に續け、後半では香を聞くことによる内面世界の確立

をさらりと表現し、黄庭堅の香についての作品のなかでも完成度の高い一首である。日本の香道界には黄庭堅作として傳わる、香の十種の功德を述べた「香之十徳」<sup>15</sup>があるが、その第六條に「塵裏偷閑」とあるのはまさにこの詩を用いており、後世への影響を知ることができる。

黄庭堅にはさらにもう一首、同韻を用いた「有聞帳中香以爲熬蠟者戲用前韻二首」(内集卷三)がある。そのうちの一首目を見てみよう。

海上有人逐臭 海上、人ありて臭ひを逐ふ、

天生鼻孔司南 天生の鼻孔、司南す。

但印香嚴本寂 ただ香嚴の本寂を印すれば、

不必叢林徧參 必ずしも叢林に徧參せず。

「帳中香」の香を聞き蠟を炒っていると誤解した人がいたことから作られた詩であり、詩題の「戲」の要素もまた「逐臭」の典故を用いる点において顯著である。『呂氏春秋』「遇合」には、體臭の強い人が親戚や兄弟にも嫌われ、ひとり海邊に住むしかなかったが、今度はその體臭を好む人が現われ、晝夜を問わずにつきまとったとある。黄庭堅

詩人の嗅覺(早川)

は言う。まさに「帳中香」も同様であり、芳香として捉える己れもあれば、炒った蠟を連想する人もあり、その美悪の價値づけはじつは相對的な觀念にすぎない。これは同年に詠まれた「次韻王荊公題西太一宮壁二首」其一の「眞是非安在、人間北看成南——眞是非、安にか在る、人間 北より看れば南となる」(内集卷三)に似通う意境であり、すべては生まれ持った「鼻孔」が「司南」する——好むところを指し示すと結論づける。

後半は『楞嚴經』卷五における、沈香の香により阿羅漢の悟りを開いた香嚴童子の故事を用いる。香嚴童子が香りを聞くや、「木」でも「空」でも「煙」でも「火」でもなく、去處も來處も定かならずと觀想し、ついには開悟して如來から「香嚴」の號を印可された。この詩では、そのよくな悟りが認められるならば「叢林」つまりは僧伽に赴いて參禪する必要もないと述べ、香りを聞き、香りを追求するという行爲の祕める大きな可能性について説く。

(三)「意和香」をめぐる五絶十首

次に「黃太史四香」のひとつである「意和香」について作られた詩を見てゆこう。黃庭堅「跋自書所爲香詩後」<sup>16)</sup>に述べられる由來によれば、「意和香」は友人の賈天錫の調合であり、香氣は「清麗閑遠、自然有富貴氣、覺諸人家和香殊寒乞——清麗にして閑遠、自然と富貴の氣あり、諸人の家の香を和するは殊に寒乞なるを覺ゆ」と大いに賞賛する。賈天錫はしばしばこの香を送り、代わりに詩を作ってほしいと依頼したため、黃庭堅は韋應物「郡齋雨中與諸文士燕集」の句「兵衛森畫戟、燕寢凝清香」を韻に用いた五絶十首を詠んだ。

ちなみに「意和香」の調合方法は複雑であり、資料により異なる部分もあるが、おおむね以下の通りである。榎植（カリン）の液に三日間ひたした沈香を主材とし、紫檀や龍茗を加え、胡麻油で煎じ、色が黄色になったものを蜂蜜湯で洗い、さらに粉末にしたものに龍腦と麝香とを少し加え、最後に棗の果肉を用いて練り合わせるといふ。黃庭堅の「跋」では「猶恨詩語未工、未稱此香爾。然餘甚寶此香、

未嘗妄以與人——猶ほ詩語のいまだ工ならず、いまだ此香に稱はざるを恨むのみ。然れども餘はなはだ此の香を寶とし、いまだ嘗て妄りに以て人に與へず」とあり、傾倒ぶりがよく傳わる。

この「賈天錫惠寶薰乞詩豫以兵衛森畫戟燕寢凝清香十字作詩報之」（内集卷五）は、前の「帳中香」に關する絶句と同じく元祐元年（一〇八六）に詠まれている。第一首は左の通りである。

險心遊萬仞 險心、萬仞に遊び、

躁欲生五兵 躁欲、五兵を生ず。

隱几香一炷 几によ隠りて香一炷、

靈臺湛空明 靈臺、空明を湛ふ。

はりつめた心は萬仞の危うきに遊び、騷がしき人欲は、傷つけるための様な武器を生みだす。しかし肘掛けに寄りながら香を焚くと「靈臺」つまり心は、はてしなく透明なるものに満たされる。「心遊萬仞」は陸機「文賦」〔「文選」卷十七〕の句をそのまま用いたが、『莊子』「列禦寇」の「人心險於山川——人心は山川より險し」によるものか、

「險」を足したことにより、さらに「遊」の危うさが引立ち、緊張感に溢れる表現と化している。「五兵」は『周禮』「夏官・司兵」に見られる語であり、五種類の武器を指す。

聞香により「靈臺」である自己の内面に新しい世界が現われるというのは黄庭堅の詩において繰り返し語られるテーマであるが、この詩では、前半における危機感の描寫の成功により、對比の位置關係にある聞香のイメージもまた一層「空明」なる存在として昇華される。また「空明」は、任淵注は陶淵明「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」は、『文選』卷二十六の「夜景湛虛明——夜景 虛明を湛う」を擧げるが、あるいは「摩訶止觀」卷九にあるような禪の十種の功德のなかの「空」と「明」という意味かもしれない、同書ではそれぞれ「空心虚豁」「阿淨美妙、皎皎無喻——阿淨美妙にして、皎皎として喩ふるなし」と説く。ちなみに「隱几」と「靈臺」もそれぞれ『莊子』「齊物論」および「庚桑楚」などに見られる語であり、濃厚な釋老の味わいを醸しだす。

詩人の嗅覺（早川）

第二首では「俗氣無因來、煙霏作輿衛——俗氣 因無くして來り、煙霏 輿衛となる」と香りが俗塵からの「護衛」の役割を果たすとして「衛」を韻字として巧みに使用し、第三首では「石蜜」「螺甲」「榎植」「水沉」などの香材料をすべて詠み込み、さらに立ちのぼる香煙にむかい「對此作森森——此に對して森森たり」と「森森」二字により嚴かなる心情を詠いこむ。さらに第四首では「誰能入吾室、脫汝世俗械——誰かよく吾が室に入る、汝が世俗の械を脱せん」と今度は自己の歡喜を他者とともに分かち合おうとする。

とくに注目し値するのは第五首である。

賈侯懷六韜 賈侯、六韜を懷き、

家有十二戟 家に十二戟あり。

天資喜文事 天資、文事を喜び、

如我有香癖 我に香癖あるがごとし。

賈天錫は任淵注にも記すように武門の家柄らしく、その人が文學を好むのは自分に「香癖」があるのと同じだと述べる。古來「茶癖」「酒癖」「馬癖」「詩癖」「錢癖」「書

癖」「左傳癖」はあるが、この「香癖」という語はこの詩以前には用例は見あたらず、黃庭堅が生み出した言葉と考えられ、關係の深かった詩僧惠洪が早速「香癖出天性——香癖、天性に出つ」と借用している。

第六首は前出の「有聞帳中香以爲熬蠟者戲用前韻二首」其二にも見られた范曄「和香方序」を詠み込み、第七首では悼亡と香とを結びつけ、第八首では「床帷夜氣馥、衣桁晚煙凝——床帷、夜氣 馥り、衣桁、晚煙 凝る」と生活のなかにおける香の美意識の發見を詠み、燈火に映える「睡鴨」のかたちの香爐に焦點をあてる。第九首では朝參時の宮中の香について述べる。結びの第十首では轉結句に「當念眞富貴、自薰知見香——當に念ふべし眞の富貴、自ずから薰ず知見香」とあり、いかにも富貴な香りを漂わせる「意和香」だが、眞の富貴とは、『壇經』「懺悔」に説かれるような自己のなかに「解脱知見香」という最上の香氣を聞くことであると結論づける。この十首はいずれも自己と香世界との關係を中心に據えており、そこには香に魅せられた強烈な自我が浮かびあがる。

(四) 他の聞香詩における描寫

最後にほかの一般の聞香の詩について見てみよう。たとえば元祐二年(一〇八七)の「謝王炳之惠石香鼎」(内集卷八)は、友人の王伯虎、字は炳之から石の香爐を贈られたのを謝する詩であり、聞香のありさまが細かに描かれる。

薰爐宜小寢 薰爐、小寢に宜しく、

鼎製琢晴嵐 鼎製、晴嵐を琢く。

香潤雲生礎 香潤ひて雲 礎に生じ、

煙明虹貫巖 煙明らかにして虹 巖を貫く。

法從空處起 法は空處より起こり、

人向鼻端參 人は鼻端に向いて參ず。

一炷聽秋雨 一炷、秋雨を聽く、

何時許對談 何れの時にか對談を許さん。

「小寢」というプライベート空間にふさわしい三つ足の香爐は、澄明な「晴嵐」をさらに磨きあげたような色合いを誇る。潤いを含んだ雲のごとき香が部屋にただよい、あざやかな香煙はまさに巖をも貫く虹のようであると想像を廣げる。これは『傳燈錄』卷四に見られる南陽慧忠の示寂

時に、暴風雨が起こり、白虹が巖盤を貫いたという故事にちなむが、なんとも力強い表現である。

頷聯が香煙を詠じた實景であるのにたいし、頸聯は禪理をからめた虚景であり、詩人は煙のなかに浮かびあがる「法」を幻視し、すべての感覚が鼻先にむけて研ぎ澄まされる。香と「法從空處起」とが相重なるイメージは、黃庭堅の「十六羅漢贊」のうち「第八尊者伐闍羅吠多羅」においても「百和香」という香が登場した次に「佛法本從空處起——佛法は本と空處より起る<sup>18)</sup>」と詠まれており、いずれも香が生まれることに形而上的意味をあたえる。

尾聯は王炳之への問いかけである。秋雨を聴きながら一人、一炷の香を點じるが、君とはいつ、このような氛圍氣のなかで語り合えるだろうか。詠物描寫もさることながら、例により己れの精神世界を見つめつつ、更には終わりにその世界の共有への希望を洩らすところに、この作品独自の味わいがある。

#### 四 「香」の認識論

二章と三章において草花および聞香の詩について検討してきたように、黃庭堅の作品における「香」は、香料、香についての外観からの描寫にとどまらず、さらには詩人の五感に迫り、あるいは陶醉し、魅了され、あるいは己れの意識を集中させる焦点というべき存在であった。言い換えれば詩歌のなかで、自己の内面における香との相互関係がこまやかに描寫され、香氣や煙の様子が心情におよぼす筆舌に盡くしがたい影響効果さえもが巧みに掬い取られる。詩のなかの人物が香に耽溺し、そして時には深い慰めを得るような極めて繊細なる心理的關係は、以前の文學作品においては俄かには見出しがたい圖式であり、しかもそれが大量に出現するのは、黃庭堅における香にたいする感覺・視點が獨特であることを證明する。

この心理的關係をさらに解明するヒントになるのが、黃庭堅による禪學の角度からの香の認識である。この問題については周裕鍇がすでに禪學的嗅覺概念から宋代文人の文



學意識についての考察を進めたなかで、黃庭堅にも多く言及している<sup>19)</sup>。以下、周氏の論を参考にしつつ、より詳細に黃庭堅的特色をさぐる立場から構造分析してゆこう。

まず黃庭堅には以下のような個人的體驗がある。元祐六年（一〇九二）以降、母の喪のための歸郷時、黃龍山に住んでいた臨濟宗黃龍派の高僧である晦堂祖心（一〇二五—一一〇〇）を訪ね、そして悟りにいたる近道を問うた。すると晦堂は『論語』『述而』の「二三子、我をもて隠せりとなすか。吾、隠すこと無きのみ」を引き、「あなたは日頃、この語をどのように理解しているのですか」と逆に問いかけた。そこで返答を試みたが、晦堂は否と言うのみであり、黃庭堅は思い悩んだ。ある日、晦堂とともに山歩きをしていると、金木犀が盛んに香りを漂わせており、晦堂の「金木犀の香りがしますか」という問いかけに黃庭堅は「香りがします」と答えた。晦堂はすかさず「吾、隠すこと無きのみ」と言ったところ、黃庭堅は釋然として悟り、拜して「和尚の懇切なるご教示に感謝します」と述べると、晦堂は笑いながら「ただ単にご自身の家に歸るといっただけ

なのでですよ」と答えた<sup>21)</sup>。

金木犀の馥郁たる香りは、鼻孔を通して深く沁みこみ、あたかも『楞嚴經』卷五の香嚴童子の故事のごとく、内に眠れる佛性を呼び覺ました。引き金となった『論語』の言葉は、その下句が「吾、行ふところとして二三子とともにせざるなきは是れ丘なり」と續くように、孔子は日常生活のすべてを通してかたちで弟子たちを教育していたが、弟子たちはそれに氣づかず「隠している」と誤解したというエピソードである。至高のものは何の隠されることもない自然體のままに、じつは目の前に存在し、氣づくかどうかの選擇は自分自身に委ねられた自由である。同じように金木犀は、秋になるとおのずと清らかな香りを吐くが、その香氣を認識して價值を見出すか否かは、自身の發見を待つのみである。

『論語』と金木犀という二種類の要素が巧みに支えあうこの逸話には、禪問答に特有の獨自の緊張感がある。儒學に精通しているはずの士大夫たる黃庭堅に示されたのは『論語』の故事であるが、その解釋は最初はことごとく否

定される。ここに深い葛藤が生まれ、話の流れも一時は袋小路に入るが、その突破口は香りであった。秋の黃龍山において金木犀の香りは、黃庭堅の身外の世界に充滿していたが、晦堂の一語により、それは認識として内なる世界に浮かびあがり、同時にすべてを讀み解くための鍵として機能する。外面の香と内面の感覺とが一致し、自己と香との關係性が浮き彫りとなり、禪理と『論語』と金木犀との三者に突如として共通項が發生し、黃庭堅は一切を身體感覺として理解する。

黃庭堅「花氣薰人帖」の詩句では「花氣薰人欲破禪——花氣 人に薰じて禪を破らんと欲す」と述べていたが、その生涯における最も本質的に「禪」である出来事はあたかもその語と相反するように、香りのなかで成就し、完結した。すでに「花氣」と「禪」とは破る破られるという對立構造ではなく、「禪」の受け皿となるものこそが花の香りに酔いしれる人の心である。黃庭堅の日常における香りへの愛着は、深いものであった。まさに不二の法門において「煩惱即菩提」というごとく、そのような執着にも似た

詩人の嗅覺（早川）

心こそが、やがては人をして内面の深い認識へと導くのであろうか。

次に挙げる黃庭堅「幽芳亭記」という文章は、香りの認識をテーマとした點において、如上の逸話と相補う内容といえる。黃庭堅「書幽芳亭」と對を成し、文中において涪翁と名乗ることから、涪州別駕として追放された紹聖元年（一〇九四）以降に書かれた作品であり、「蘭」と「風」および香りの認識という三つの關係性を、俗語を駆使した禪味溢れる筆致により述べた作品である。

三者の關係という構成および「風」という道具立は、六祖慧能の「風幡論議」——風が揺らすのではなく、幡が揺れているのでもなく、自身の心が揺れていると説いた故事を連想させる。また周裕鍔はこの文章を基本的に、『楞嚴經』卷三の世尊と阿難尊者の問答のなかの焚香にまつわる一段を演繹したものとす<sup>22</sup>。しかし、その問答原文を實際に詳しく見てみると、「香」という認識が「香木」「鼻」「空間」の三者から生まれることを否定し、また「香」と「嗅覺」とは虚妄の認識であることを説くのみである。い

ずれにせよ黃庭堅は單純なる燒き直しではなく、左の如く、更に多くの工夫を加え、獨自の認識論を説き起す。

文章はまずこのような内容から始まる。「蘭」は深林に生えており、人の知ると知らざるとに關わらず、その本質からして芳しい。しかし清らかな風が吹かなければ、その香が發散して人の鼻に届くこともない。まさに「蘭」と「風」との兩者の邂逅があつてこそ始めて眞價が發揮されると説く。そして以下のように述べる。

且道這蘭香從甚處來、若道香從蘭出、無風時又却與萱草不殊。若道香從風生、何故風吹萱草、無香可發。若道鼻根妄想、無蘭無風、又妄想不成。若是三和合生、俗氣不除。若是非蘭非風非鼻、惟心所現、未夢見祖師脚根、有似恁麼、如何得平穩安樂去。<sup>23</sup>

且つ這の蘭香の甚れの處より來たるかを道ふに、若し香は蘭より出づと道はば、風無き時に又た却て萱草と殊ならず。もし香は風より生ずと道はば、何の故にか風の萱草を吹くに、香として發すべき無きや。若し鼻根の妄想と道はば、蘭なく風なくんば、又た妄想も

成らず。若し是れ三つ和して合はせ生ずとせば、俗氣除かず。若し是れ蘭にあらざ風にあらざ鼻にあらざ、惟だ心の現はるところとせば、いまだ夢にも祖師の脚根を見ず、恁麼に似たるあらば、如何んぞ平穩安樂に去るを得ん。

蘭の香りは、どこから來るのか。①蘭が香るとだけ言うなら、風のない時には、普通の香りなき草に異ならない。

②風が香るとだけ言うなら、風が普通の草を吹いても、芳香を漂わせはしない。③嗅覺による幻想とだけ言うなら、そもそも「蘭」と「風」がなければ始めから幻想など成立していない。「蘭」「風」「嗅覺」という三者の個別の可能性をことごとく否定した後、さらに④三者合一として捉えるのも「俗」であるとして一蹴する。では「風幡論議」のように⑤「心」の現象として解決するのはどうか。黃庭堅は手厳しく「祖師」たちの足もとにすら及ばず、その有様では平穩安樂など夢物語だと痛罵する。

①②③④⑤のあらゆる側面からの理解方法はすべて否定され、「どこから來るのか」という問いかけに對しては何

の解決も示されず、最後には「この事を説明し盡くしたとしても誰が信じてくれようか。もし、これでも駄目というなら、彌勒下生を待つしかない」と結ばれる。あたかも眞實は、禪問答の言葉遊びを超越したところに存在するといふが如く、黃庭堅はみずから手で突破不可能な迷宮を造りだした。このような修辭法にも一理ある。もしここで結論づけるならば、読者は何かの回答を得たことに満足してしまい、「香」の本質にむけての探求はそこでストップする。結論をあえて拒絶することにより、さながらメビウスの輪の如く、回答は保留されたまま、思索の可能性は永遠に——いや、彌勒下生の龍華會の曉まで續いてゆく。

「幽芳亭記」のなかには黃庭堅の「香」にたいする觀念が凝縮され、一種の解答なき哲學へと昇華されている。ここにおいて要素として登場した「香」は「蘭」であった。しかし提示された圖式自體は必ずしも「蘭」に限定される必要はなく、他のあらゆる「香」と人との關係として讀み替えることが可能である。草花や香料という多種多様な香も、それを認識する人との結びつきという問題において、

かくも不可思議にして繊細なる均衡のうえに成立しており、更にはその理を追及することにより、新たな意識の深層をも切り開きうる可能性をあわせ持つ。

このような香の認識を下敷きとするために、たとえば黃庭堅の偈頌「十六羅漢贊」の「第八尊者伐闍羅吠多羅」における「百和香中本無我——百和香中、本と我なし」のうに、諸種の香料を調合した最上の香を述べつつ、あえて更に「我」の不在を説く。反對に、香における「我」を前面に押し出すならば「第一尊者賓度羅跋羅檀闍」の「以我身心五分香、作光明雲雨大千——我が身心の五分の香を以て、光明雲と作して大千に雨ふらさん」のように自己の悟れる身と心を、「壇經」「懺悔」に説かれる開悟の「五分香」とし、その香煙を輝ける雲と變えて三千大千世界に甘露の雨をふらせようと詠いあげる。「香」は享受されるのみならず、同時に「我」から世界にむけて發散されるものと化し、その思想的幻想は止まるところを知らない。

## 五 小結——嗅覺により認識される藝術價值

黃庭堅における「香」とは以上のように、思索の対象ともなりうる一つの概念であった。ゆえにこの概念「香」を借りながら、さらに幅廣く他の藝術の價值をも説明しようとする独自の傾向が見られるのは自然の流れであろうか。

北宋においては『楞嚴經』に由來する、人の感覺器官である眼耳鼻舌身意は「圓通」なる情況下において相通じ、相補うという所謂「六根互用」という思想が顯著に見られ、たとえば東坡における食品の味わいにより詩歌を品評した語が多く見られるのもその現われという<sup>⑤</sup>。そして黃庭堅においては、まさに嗅覺による「香」であった。

晩年の崇寧三年（一一〇四）、宜州への流罪の道すがら、衡州の花光寺に立ち寄り、墨繪の梅の名手である花光和尚超然を訪ねた。その前後の時期、黃庭堅は何首か關連する詩文を作っており、そのうちの「書贈花光仁老」では、梅の繪の感想として次のように述べる。

乃知大般若手、能以世間種種之物而作佛事、度諸有

情。於此薦得、則一枝一葉、一點一畫、皆是老和尚鼻孔也<sup>⑥</sup>。

乃ち知る、大般若手は、能く世間の種種の物をもて佛事をなし、諸有情を度すと。此において薦得すれば、則ち一枝一葉、一點一畫、皆なこれ老和尚の鼻孔なり。

「薦得」は宋代の禪語録によく見られる俗語であり、知る・知り合う・認識するなどの意味がある。優れた禪者は、いわゆる修行のみならず世間のあらゆる物事を通じて佛道を實踐し、衆生を濟度する。もしこの事を知り得たならば、一幅の墨畫のなかの「一枝一葉」の構圖、「一點一畫」の繪畫技法もみな全て花光和尚の「鼻孔」であるという。藝術水準・審美能力および佛道修行にいたるまでの多くの要素は、「鼻孔」と一語に代表された。それは直ちに馥郁たる梅の花・墨の香氣を連想させ、墨畫に表現されたものは和尚の嗅覺により認識された香世界であるという解釋が提示され、すべての價值づけの判斷が嗅覺に集約される。

この特殊な意味合いを持つ「鼻孔」は、文學を評價する時においてもその力を發揮する。『香譜』を編んだ洪芻に

むけて作詩法を説いた「與洪甥駒父書二首」其二には次のように書かれる。

大體作省題詩、尤當用老杜句法。若有鼻孔者、便知是好詩也。

大體 省題の詩を作るに、尤も當に老杜の句法を用ふべし。もし鼻孔ある者なれば、便ち是れの好詩なるを知るなり。<sup>27)</sup>

科場において詩を作るときには杜甫の句法を用いるべきであり、「鼻孔」を供えた試験官であれば、それが良い詩であると當然のことながら分かるであろうと説く。優秀なる文學を識別する鑑識眼もまた、香に精通した黃庭堅と洪芻の共通認識においては、このように文字通りの「嗅ぎ分ける能力」であった。すなわち文學作品を正當に評價する心は、香りへの鋭敏な感覺に類似するということであり、黃庭堅における香と文學という兩者の關係を確かに結びつける表現として注目される。

このような嗅覺による文學の品第法という發想は、後世にも往々にして見られる。たとえば錢謙益「香觀說書徐元

詩人の嗅覺（早川）

歎詩後」および「後香觀說書介立旦公詩卷」のなかで理論化された「香觀說」として述べられ、前者では段託した隱者の言葉として「夫詩也者、疏淪神明、洩汰穢濁、天地間之香氣也。……吾廢目而用鼻、不以視、而以鼻詩之品第、略與香等——それ詩なる者は、神明を疏淪し、穢濁を洩汰する、天地の間の香氣なり……吾れ目を廢して鼻を用ひ、視ることを以てせずして、以て詩の品第を鼻かぐこと、略ほ香と等し」<sup>28)</sup>とあり、詩歌とはそもそも香であるという獨自の見地が説かれる。また『聊齋誌異』「司文郎」に、文稿を焼いた臭いから文章の優劣を識別できるという怪僧が登場するのは、最も極端な逸話であろう。これらの例と黃庭堅との直接の影響關係は立證しがたいが、いずれにせよこの種の文學の評価方法を嗅覺に求めるといふ獨特の見方は、北宋以來の「六根互用」の思想の範疇に屬している。

以上のごとく黃庭堅における「香」は、花の香りに搖り動かされる詩情に始まり、最後には藝術の評価にまでつながる。『法華經』「法師功德品」には『法華經』を受持するものは「八百鼻功德」を成就し、三千大千世界のあらゆる

香りを聞くことが可能であり、天上の花・埋藏金のある場所・装身具の價值・佛菩薩の在所などをも全て嗅ぎ分け、他人にその香りの違いを語るときには誤りがないと説く。黃庭堅は前世において『法華經』を受持した女人であったという傳説があるが、その香りへの敏感な感覺はまさに前因にも似た天賦の性であった。萬能の天才ともいえる黃庭堅が足を踏み入れて活躍した分野は多岐にわたるが、「香」は、その「詩文」「禪學」「草花に對する愛好」「醫藥」などの廣い分野をつなぐ一本の線としての役割を果たしており、その人を語るに不可闕のキーワードといえる。

註

- 本稿引用の黃庭堅の詩および編年は黃寶華『山谷詩集注』（任淵・史容・史季溫注・謝啓崑補遺）上海古籍出版社、二〇一五年版に據り、その集名および卷數を記す。その他の散文等は鄭永曉『黃庭堅全集（輯校編年）』江西人民出版社、二〇一一年版を用い、頁數を注記する。
- ① 中國法書選『黃庭堅集』二玄社、一九八九年、六〇一頁。
- ② 宋代以降、吟詠對象として發展したこれらの花については、それぞれ專論がある。中尾彌繼「蠟梅詩について」（佛教大

- 學『佛教大學大學院紀要』第三〇號、二〇〇二年）、宋代における醴醢詩について」（宋代詩文研究會『檄欖』第十四號、二〇〇七年）、宋代の水仙花―詩詞に見る黃庭堅の影響について―」（中國言語文化研究』第十二號、二〇一二年）、加納留美子「神仙から花へ——「水仙」の變遷と「水仙花」の受容」（『檄欖』第一九號、二〇一二年）などに詳しい。
- ③ 『黃龍晦堂心和尚語錄』『偈頌』、『卍續藏』第六九冊。
- ④ 山礬に植物學的に對應する和名については、俄かに特定しがたい。なお「ジンチョウゲ」とするのは全くの誤りであるという。中尾彌繼「宋代の水仙花―詩詞に見る黃庭堅の影響について―」（注②に前掲）の注釋（九）を參照。
- ⑤ 『黃庭堅全集』一一九九頁。
- ⑥ 劉靜敏「靈臺湛空明——從『藥方帖』談黃庭堅的異香世界」（『書畫藝術學刊』二〇〇九年第七期）、邱美瓊「黃庭堅與香」（『文史雜誌』二〇一四年第一期）などがある。
- ⑦ 『吉川幸次郎全集』十三卷、筑摩書房、一九六九年。
- ⑧ 八種の香の製法および跋文は、いずれも『黃庭堅全集』一六七―一七頁に本文がある。この部分の出處は、南宋乾道年間刊本『類編增廣黃先生大全文集』卷四十七。
- ⑨ 本稿では『陳氏香譜』は原型に近い四卷本（四庫本）を參照した。専門の研究としては劉靜敏『陳氏香譜』版本考述」（『逢甲人文社會學報』第一三期、二〇〇六年）がある。
- ⑩ 『黃庭堅全集』一四五―一七二頁。

- ① 本稿では「四庫本」および「百川學海本」などを参照した。版本については劉靜敏「宋洪芻及其『香譜』研究」（逢甲人文社會學報）第十二期、二〇〇六年に詳しい。
- ② 『山谷別集』卷下「和柳子玉官舍十首」の題下注および『茗溪漁隱叢話前集』卷四十七などに引用される『洪駒父詩話』に説かれる。
- ③ 『蘇軾詩集合注』上海古籍出版社、二〇一三年版、一三九六頁。
- ④ 周裕鍇『法眼與詩心——宋代佛禪語境下的詩學話語建構』第三編・第一章・第二節「鼻觀圓通…聞香如參禪」（中國社會科學出版社、二〇一四年）を参照。
- ⑤ 傳黃庭堅「香之十德」は中國の文獻には見られず、あるいは日本人の作である可能性もある。この問題についての專論はないため、稿を改めて論じたい。
- ⑥ 『黃庭堅全集』四四八頁。
- ⑦ 惠洪『石門文字禪』卷七「送元老住清修」。（四部叢刊本）
- ⑧ 『黃庭堅全集』一三八七—八頁。
- ⑨ 注⑭に同じ。
- ⑩ この逸話の時期については鄭永曉『黃庭堅年譜新編』（社會科學文獻出版社、一九九七年）二四七頁を参考にした。
- ⑪ 逸話の内容は『五燈會元』卷十七「黃龍心禪師法嗣・太史黃庭堅居士」による。同じ内容の逸話は『羅湖野錄』卷一、「鶴林玉露」丙編卷三などにも記載される。

詩人の嗅覺（早川）

- ⑫ 周裕鍇『法眼與詩心』（注⑭前掲）一五〇頁を参照。
- ⑬ 『黃庭堅全集』九六二頁。
- ⑭ 『黃庭堅全集』一三八七—八頁。
- ⑮ 周裕鍇『法眼與詩心』（注⑭前掲）第二編・第一章「楞嚴」的「法身哲學」および第三編・第一章「楞嚴」六根互用的「審美實踐」を参照。
- ⑯ 『黃庭堅全集』一二六五頁。
- ⑰ 『黃庭堅全集』七七九頁。
- ⑱ 錢謙益『牧齋有學集』卷四十八、上海古籍出版社、一九九六年、一五六七頁。
- ⑲ 何遠『春渚紀聞』卷一「坡谷前身」。